



かさりかさりと落ち葉が擦れ、ちり取りがコンクリートの床にぶつかる音が妙に大きく感じられた。

蝉の声はもうなく、五階では虫の鳴き声も聞こえない。

その静けさに、ふとわれに返るような気がした。

ベランダが思った通りのありさまなのを見て、加凜^{かりん}は掃除をはじめたのだった。

今日は写真館の定休日の水曜で母親の通院日でもなかったが、いつものようにカメラ片手にいい被写体を求め、街にくりだす元気はなかった。写真館というのは加凜の勤め先だ。彼女はそこでフォトグラファーをしていた。

もう、ひと月ほど水やり以外は手をつけていなかったのも、鉢植えが排出した植物の残骸が散らばっていた。風で隣りのベランダに行っていなければいいがと思う。マンションのベランダの限られたスペースにテラコッタを置いて、ガーデニングをするのが、今のささやかな楽しみだった。どうしても土や植物がないとさびしい気がするのだ。葉も花弁も乾燥しきって、夏の面影はとどめていない。どこからともなくやってきた埃も混じりあってベランダの床を汚していた。

加凜はジーンズに長袖Tシャツを着て、髪をバレッタで無造作にまとめた姿だった。三十代ももうじき終わりだが、童顔のせい、まだ二十代としか思われぬのはありがたかった。

今まで周りからは縁談を勧められたり、結婚しないのを不思議がられたりしてきたが、すべてはねのけてきた。女の幸せは結婚なしにはありえないと、みんな思っているのかもしれない。

だが、そんな偉そうな反論を抱きつつも、実は、自分も、こころのどこかで憧れているというのが正直なところだ。でも、そんなことを言ったら、じゃあなぜなのと不思議がられるだろう。

『黒田さんは、誰か忘れられない人でもいるの？』

前に、会社で定年間際の係長に、眉を潜めて尋ねられたことがある。他の子と違って、浮いた噂もないのに合コンなどに参加しなかったからだろう。女心が自分には解ると自信ありげだった。このときは怒りを抑えつつ、きっぱり否定すると、おかしいなあと首をふりながら笑って誤魔化していた。

運命の人がいるなんて、昔は思わなかった。

でも、彼に出逢ったとき、なぜか彼がそうだと確信してしまったのだ。松作^{ひづくり}賢司のことを、何年ものあいだ忘れたことはなかった。

そして、昨日、街で彼を見かけた。

アーミー・コートのポケットに両手をつっこみ、木の下に立っていた。少し年齢の落ち着きを増してはいても、通った鼻筋、大きいのに切れ長の目は、変わっていないようだった。他人の空似だろうか。でも、加凜をじっと見つめているように見えた。それなのに、すぐにきびすを返して、人ごみの中に消えていった、加凜は急いで追いかけたが、間に合わなかった。

帰ってきたのだろうか。探してくれたのかもしれない。なのに、なぜ声をかけてくれないのだろうか。

もしかしたら、幻影を追いかけしているだけかもしれない。自分でも、自分のことを心もとなく思った。こんなことを思いつめても仕方ない。

遠くに目を移せば、遙か遠くの山並みをすじ雲がなでるように通り抜けていく。

自分はただ待ち続けるだけの女になるつもりはなかった。待っても来てくれないと、嘆くつもりはない。現実をしっかりと生きていく。そういう覚悟は持っていたいのだ。

もうちょっとしたら、あまり実をつけなくなったトマトは抜いて、来春のための球根を植えようか。フリチラリアなんかは面白いかもしれない。あの気高い花の佇まいを想像すると悪くない気がした。

ふいに、壁の下の方に目を移すと、フクロウのような顔があるのに驚いた。

よく見ると、羽を広げてとまっているヤマユガの仲間らしき大きな蛾だった。羽の文様がまんまるな二つの目みたいに見えるのだ。夜に街灯の周りをしつこく飛び回る蛾は身の毛がよだつほど嫌いなのだが、蝶に似た大きなアイボリーの羽はぴくりとも動かないし、上の方についている本物の顔はよく見ると可愛かったので、見逃してやることにした。夜になったらどこかに飛んでいくことだろう。

ベランダから部屋に戻ると、加凜は夕食の準備を始めた。母親は病み上がりの体で、ゆっくり歩いてきて、手伝ってくれる。

「今日はどうするの？」

「手羽先の八角あまから煮と、あとは小松菜の煮びたしでも作ろうか。お母さんはサラダを作ってくれる？」

「いいわよ」

母は近頃では相当元気になってきたが、ひとりでいたらどうなってしまうのかわからない。ひとりのときには、テレビもつけずにぼんやりしていたり、眠っていたりすることが多いようなのだ。

次の日の朝八時半、加凜はすぐり栖栗写真館に出勤した。

入口には低めの鉄門があるが、お客様が入りやすいように開け放たれている。ファザードにはススキ、りんどう、われもこう吾亦紅、ホトトギスも配され、すっかり秋の装いだった。建物は大正モダニズムと言ったらよいのだろうか、日本家屋にアールデコを取り入れたその当時、最先端をいっていたもので、少し増改築して栖栗氏のスタジオ兼自宅として使っていた。その魅力は、今も薄れていないように見られる。

スタッフの中では、一番乗りのはずだ。

暗いスタジオに足を踏み入れると、いつも通り、奥に電球の暖かみのある光が見えた。歩きやすいようにいくつかスポットライトのスイッチを入れて中に入っていくと、奥のソファに栖栗が腰掛けていた。切りそろえたグレーの鼻鬚の下にはパイプをくわえている。猫脚の脇机にはアールデコのランプが灯り、壁にはフェルメールの絵の模写がかかっていた。

「おはようございます」

「やあ、おはよう。黒田君」

脇には、ステッキが立てかけてあった。栢栗茂はもう七十五歳をこえているが、シルバーグレイの頭髪や落ちついた顔つきは品よく見えるし、鋭い眼光はまだまだ、自己を保ち続けている証拠だ。

いつも通り、コーヒーを沸かし、栢栗のところにカップを持っていった。

「今日の予約は、十一時と、十五時、それから十八時にそれぞれ一組ずつです」

「そうかね。どんな人達かい？」

「初めの方が、成人式の記念写真をスナップをまじえて撮りたいという女性で、振袖です。着付けとメイクはハナさんに十時から頼んであります。十五時の方はご夫婦で銀婚式の記念写真を撮りたいそうで、最後の方は就職の履歴書の写真を良く撮ってもらいたいというご希望です」

「なるほど。じゃあ、君はどこどこで撮影するといいと思うんだい」

「成人式の女性は中庭の池の橋の上と、応接室の庭に面したソファの座位」

「だめだめ！ 応接室よりソラリウムの方が、全面から光が入るから着物が映える」

ソラリウムとは要するに庭に増築した大きめのサンルームのことで、栢栗氏はそう呼ぶのが常だった。だが、背景の調度品のしつらえが応接室の方がアールデコの様式美が出ていて良いと加凜は思ったのだ。

否定するなら、はじめから聞いてくれなくていいのにも思う。それに、本当はお客様の希望も聞くべきだろう。でも、プロの写真家は客に可能なかぎり良い成果物を提供すべきで、その判断は写真家が責任を持つべきだというのが栢栗氏の持論だった。

栢栗氏は柔和そうに見えて、実は、とてもポリシーの堅固な人だった。すべて、自分でやるのと同じようにしてくれないと不機嫌になる。だから、前もって確認することは不可欠だった。正直言って、一緒に仕事をしていくのは難しく感じていた。栢栗氏はい去年まではほとんどの仕事を自分でやっていたが、リュウマチで手足が不自由になり、それがとうとう最近では写真を撮ることもままならなくなって、手足となって働いてくれる助手として、加凜を雇ったのだった。そんな訳で、加凜は、ただ彼のやり方を学ぶことにしていた。今は、栢栗に意見する勇気も自信も持ち合わせていない。

「この`天秤を持つ女、をご覧。こんな風に光を感じる絵は、いくら見ても見飽きない。写真も同じだ。光を感じるということは影もあるということだよ」

栢栗氏が壁のフェルメールの絵を、震えるパイプの先でぎこちなく指して言った。彼の口癖だが、このことには加凜も共感していた。

「でも、全面から光が入るソラリウムでは、その肝心の陰影が出にくいんじゃないじゃありませんか？」

「そこなんだよ。そこが考えどころだ。太陽は刻々と位置を変えている。だから、全面から光が入るところでは、光が差し込む方角を選ぶことができる。光の入る側のカーテンは開けるかレースにして、その他の側のカーテンをゆるくドレープさせて束ねてやれば、良い具合に撮れるさ」

フェルメールは肉眼ではなくカメラ・オブスキュラというカメラの原型のようなものを覗きながら、描いていたと言われている。肉眼より陰影が誇張され切り取られた世界。そんな世界を、写真で表現したいと加凜も思っていた。

郊外にある個人の写真館で、毎日数組の客が来るのは繁盛しているほうだった。これはひとえに、アメリカの写真雑誌LIFEに作品を載せたこともあるという栖霞氏の評判と、この建物の魅力から来ているのだと加凜は思う。この写真館では、ライトやスクリーンが確保されたスタジオでの撮影のほかに、自然光を利用したものも請け負っていた。つまり、窓から入る陽の光だけをたよりに、室内や中庭で撮影するものだ。日常とは違う空間でありながら、人物はまるでそこの住人のように写りこむ。この建物にはそういった撮影に格好のスポットが随所にあった。

最初の客が来るまでにまだ時間があったので、現像のために暗室に入った。

ここは、昔ながらの写真館らしく、スタジオ撮影では中判カメラを使っていた。このフィルムは一般に目にするものの倍ほどの大きさの120フィルムで、DPEが使えないこともあり、現像は手作業だった。今はデジタルカメラを使い沢山のカット数を撮り、これを客に選ばせたり画像データも提供する写真館も増えていて、加凜もそういうサービスを始めなければ時代に取り残されるのではと心配していたが、栖霞氏はまったく取りあわなかった。デジカメは、まだまだ解像度の面で劣りはするが、素人目にはまったくわからない。それでも、栖霞にとって、写真館の伝統というのは簡単に変えてしまえるものではないようだった。

現像液をつくり恒温バットに移し、定着液も隣りのバットに入れ、電熱器のスイッチをonにした。現像済みのフィルムを引伸機にセットし、ピントを合わせ、ちょうどいい露光を決めたら、あとは単純作業の繰り返しだ。今日は何枚か試してみて、赤みが強かったのでCC-YとCC-Mのフィルターを入れ、露光時間は五秒で行くことにした。五秒なんてあつという間だ。「だるまさんがころんだ」を唱えるくらいの時間。長すぎても濃くなってしまおうし、短くてもぼやけてしまう。焼きつけの終わった印画紙を現像液に移しピンセットで振りながら、暗室用タイマーとにらめっこして、画像が浮かび上がってくるのを待ち、定着液に移す。この一連の作業を繰り返していく。

こんな作業をしていると、どうしても色々な思いが浮かんでくる。

今の自分が、これまで目指してきた、なりたかった姿なのか、加凜はいつも自分に問う。今は、わからないという答えしか返ってこない。いつか満足な自分になれる日は来るのだろうか。写真コンテストに受ければ、フリーカメラマンへの道が開かれるかもしれない。そうなれば、満足できるだろうか。わからないが、とにかく、今はそれしか目標を思いつかない。一度決めたからには、達成するまで頑張ってみよう。加凜は懸命に自分に言いきかせていた。

加凜は写真学科専攻の新卒で大手新聞社に就職し記者を経て、ようやく念願のカメラマンの座を射止めたあと十年働いたが、連日深夜におよぶ残業がたたリ体を壊した。ちょうど母親が倒れたことも重なって、迷った末に退職した。運良く母親は一命をとりとめ、今は経済的な余裕もないので実家で一緒に暮らしていた。それで、今年の春から、知合いが紹介してくれたこの写真館の手伝いを始めたのだ。

男と同じように出世を目指すのもひとつの道だが、何かもっと自由な道を探してみたくなった。

四十を目前にし、一度はひどく落ち込んだこともある。でも、女の四十歳はそれほどおばさんではないとも、近頃、思う。だから、ただぼんやり夢みているのはもうやめた。あえて、馬鹿げた夢を今から本気で追いかけてみようと考え始めていた。写真コンテストで賞を撮り知名度を得て、フリーカメラマンになることを目標に休日に写真を撮り始めたのだ。

九時四十分、もうそろそろ最初のお客様が着付けのために来るかもしれない。

着付けやヘア、メイクの予約がある方は直接美容院へ行くように説明を送っていたが、それでも、まず写真館に来てしまう人が多かったのだ。

明かりをつけて、出来上がった写真をさっとチェックしてみて、加凜はうんざりした。また、写っていたのだ。

一枚の写真の端の方に、白い光の塊りが浮かんでいた。それも、頭や手のある人のような形に見える。はじめてこれを見たとき、心霊写真だと思って不気味に感じた。だが、栖栗氏に見せると、思わぬ答えが返ってきた。

『この館には、座敷童子がいるんだよ。ときどき、映りこんで悪さをする』

彼独特のウィットだと思って、加凜は思わずほほえんだ。

『嘘だと思うだろう。だがね、私は姿を見たことがある。あれは五歳くらいの女の子だった。昼間だった。赤いベベを着て、顔や手は白く光っていたよ』

加凜はぞっとして言葉を失ったが、栖栗老人は話を続けた。

『あれを見るといいことがあるんだよ。家は繁栄するし、商売は繁盛すると言われている。保証するよ。だが、誤解されると困るから、客には絶対言わなくてくれよ』

本当にそんなものがこの館やかたにいるのだろうか。

でも、いくら幸運のしるしだと言われても、写真に写られては迷惑だった。修正作業にはとても手間がかかる。

写真をそのままにして暗室から出ると、女の子が立っていた。栗色に染めたスパイラルヘア、どんぐり眼をくりくり動かし、快活そうで愛嬌がある。どこかで会ったことがあったかと一瞬思ったが、思い出せなかった。ミニに近いスカートからは、すらっとした足が伸びていた。

「あの、もしかしてご予約のお客様ですか？」

「いえ、違います。今日から、あたらしくバイトに入った楠山くすやま万由子まゆこです。よろしくお願いします」

「そうなの。よろしくお願いします。黒田加凜です」

バイトの話など聞いていなかったと加凜は思った。

勢い良く扉が開いて、栖栗老人の孫息子の礼郎れおが入ってきたが、横柄な彼は挨拶もそこそこにスタジオに入っていった。

「あの人はいつもああだから、気にしないで」

加凜が気遣って言ってみると、彼女はけろっとした顔でうなずき、こう切り出した。

「それで、栖栗さんは黒田さんに仕事を教えてもらうようにって言ってました」

前もって説明もなかったのに、教えろなんて言うことを少し腹立たしく思った。

「いつ面接だったのかしら」

「今朝。ノンアポで、何でもいいから仕事を下さいって頼んだんです。あたし、この写真館を見た瞬間に、絶対ここで働きたいって思って」

「そうなの。写真のことは少し知っているの？」

「ううん、全然」

「高校生？」

「いえ、高校を卒業してフリーターをやっています」

話具合からして、やはり若そうだ。二十歳ぐらいだろうか。

加凜は、気安くこんな子を雇ってしまう栖栗にあきれてしまった。だが、栖栗は決して財布の紐ひもがゆるい方ではなかったもので、この子はそれほどお給料をもらえないだろうとも思った。

「これから、撮影の予約があるの。それが終わったら説明してあげるから、ちょっと待ってね」

成人式のお客は、十時ぎりぎりにやってきた。笑顔が可愛い。横から撮っても様になる顔だと思った。今時の女の子らしく、クールでものおじしないタイプらしい。

はす向かいの美容室に行くように伝えたと、急いで出て行った。それから栖栗に確認をとってから、小一時間、楠山万由子に説明することにした。

とりあえず、加凜と礼郎でシフトを組んでこなしていた受付をおもに彼女に任せ、そのほか加凜がやっていた雑用をいくつかお願いすることにした。

撮影は、栖栗氏が言った通り、ソラリウムと庭のガーデンベンチと太鼓橋の上、それにスクリーンをバックにしたスタジオ撮影を行うことになった。

彼女の着物はイメージにとっても合っていた。柄は鮮やかなピンクに黒を取り入れてあり、半襟にもピンクのレースを使っていた。若い子らしく伝統を気にせず流行をいち早く取り入れている。そのことをさり気なく褒めると、少し笑顔が和らいだように見えた。結局、写真は緊張しては、上手く撮れないのだ。しばらく雑談などして、気持ちをほぐしてあげるのが大事だった。その後、ポーズや笑顔の作り方の簡単なレッスンをしてから、撮り始める。

太鼓橋のたもとでは広角でゆがみを出してみたし、ガーデンベンチでは、背景をぼかすため望遠で、ななめ後ろを振り返っているポーズで撮ってみた。彼女は、やはりどれも様になっていてやりやすい。でも、こういう子は誰が撮っても綺麗に写るはずだ。普段は少し内気で目立たないような子の美しい瞬間、角度を捉えるのが本当のプロだと、近頃、加凜は思う。そんな写真が撮れたときのお客様の喜ぶ顔をみると、仕事をしていてよかったと感ずることができた。だが、撮りやすいのは楽なので、それはそれで歓迎だ。

それぞれの場所で五カットずつ撮ったが、デジカメならこの十倍以上撮ることが可能だ。でも、フィルム写真ではネガ代やら現像の手間などもばかにならない。それに、どんな風に撮れているか現像するまでわからないのが怖い。もしも撮れていなかったら、笑いごとでは済まされない。そのための緊張感が常に現場にあった。

スタジオでの撮影の途中で思い出して、万由子の様子を窺うと、お客様とはぜんぜん違う方を見て笑っているのが少し驚いた。

その日、隣の休憩室から、いつにない笑い声が響いてきた。こっそり近づいて聞き耳をたてると、栖栗氏と万由子が笑い声をたてながら、話しているのだった。

「それで、私は月夜の写真を撮りたいの」

「ほうっ、それは面白い」

「うん、先生、知らないでしょ。満月の晩の草原ってキレイなのよ。草が夜露で光って、銀色に光るんだから。思わず、踊り出したくなるくらいだよ」

「ほう、もしかしたら、踊ったことがあるのかな」

「内緒だけど、しょっちゅう」

「ハハハッ、君は面白い子だね」

こんな風に栖栗と気安く話す万由子に、加凜は心のどこかに嫉妬に似た感情が芽生えつつあるのを感じた。万由子は、写真には、まったく素人で、アルバイトといっても、電話対応、受付、掃除程度しかやっていないのに、もう、何年もここにいるかのように栖栗と話している。でも、決してそんなことを顔に出してはいけない。悟られるのは屈辱だった。

加凜は思い切って、休憩室の中に入っていった。

「楽しそうに盛り上がってますね」

「ああ、黒田くん。いや、彼女は面白いよ。月光写真を撮りたいらしい」

「月光写真？」

「うん、太陽光ではなくて、月光を使って写真を感光させるんだ」

月光写真だなんて、万由子はただ思いつきで言っただけだ。そんなことをこんなに面白がるのかと、加凜は、また少しあきれてしまった。

礼郎が、不機嫌そうな顔をして休憩室に入ってきて、コーヒーを淹れ始めた。栖栗の机の上にあるフォトスタンドの中の亡き栖栗夫人、ソフィーの面影が強く感じられる。こういう人をクウォーターと言うんだったかと、はじめて会ったときには思ったものだ。

「なんだ、礼郎、調子はどうだ」

栖栗が声を掛けたが、彼はいつも通り返事をしない。

「返事ぐらいしたらどうだい」

礼郎と栖栗氏との仲は、はた目からもぎくしゃくしているのが明らかだった。

彼は栖栗氏のやり方をすべて、時代遅れと決めつけていた。だから、ここから早く出て独立したいと考えているらしい。そうなったら、きっとデジカメを使ったあたらしいサービスを始めるだろう。加凜も、時流に乗るべきだと考えていたが、心のどこかでフィルムに一種の郷愁のようなものを感じているのも事実だった。フィルムは、決して便利なものではないが、過去の遺物のように博物館でしか見られないものになるのは寂しいとも思う。どっちつかずで優柔不断な性格

に嫌気がさして、自分でもどうしたらいいのかわからなくなることがある。でも、単純には割り切れない者の方が人間らしい気もする。

それでも、時代の流れはやはり止めることは出来ないのだろう。

その日の晩、マンションに帰りつきポストを開けてみると、新聞の隙間に、一瞬、ダイレクトメールと見間違えそうになったが、一通の封書が入っていた。茶封筒に印刷された探偵事務所の文字が目飛び込んできた。差出人は、なんと松作だった。やはり、あれは人違いではなかったのだ。

急いで部屋に戻り、あけてみた。

——元気にはしてますか。突然、こんなお便りを出して、驚かれるかもしれませんね。なんだか急に懐かしく思って、顔を見てゆっくり話そうと思ったんですが、迷惑かと思ってやめました。いつか、何か困ったことがあったら連絡下さい。相談ならいつでも乗りますから。

迷惑なんかじゃないのにと加凜は思った。会いたいと言うわけではなく、相談に乗るなんて言うのが彼らしい。

それでも、彼からの連絡に加凜はこころを^{おど}躍らせていた。

『また、会ってくれますよね』

加凜は無理かもしれないと思いながらも、あの時、そんな言葉を口にしたことを考えていた。あれから、五年も経ったのだ。

戻るときには、いつも結構な衝撃とともに地面に叩きつけられる。今日も気付くと、コンクリートの冷たい感触を感じて、まだ、死んではいなかったと思った。

桧作は道端から起き上がり、ゆっくり歩き始めた。

街並みは、もう夕闇に包まれようとしていた。

自分は、どうしてこうなってしまったのだろうか。

ふいに寂しさが込み上げ、あの子の住む街に足が向いた。

加凜が実家に戻っているのは知っていた。

最寄り駅のコンコースでずっと待ち続けた。

こんなことをしていても、どうせ会えないだろう。通勤時間なんて毎日違うし、通り過ぎて気付かない可能性が高い。

でも、彼女は来た。髪は伸びて、少し印象は変わっていたが、確かに彼女だと思った。一瞬、目が合ったように感じた。だが、次の瞬間に、自分は何をしているのだろうかという醒めた気持ちに支配された。彼女に何を言えばいいのだろうか。逃げるようにそこを立ち去った。

住居兼事務所のマンションへ辿りつき、桧作探偵事務所と書いてあるポストをチェックした。いつも通り、ダイレクトメール、新聞が入っているだけだった。現在、桧作は探偵事務所をやっている、普段は依頼を受けて、夫の浮気や子供の素行などの調査を格安で請け負っている。

だが、それは表向きで、実は桧作は特殊能力を使った調査を行っていた。

信じがたいかもしれないが、それは過去に^{さかのぼ}遡って起きた事件の真相を見てくるというものだった。だが、この能力を信じる人は少ないし、証拠をつかんでくるのも難しい。それに、おかしな人物に能力を知られるのは危険だった。だから、危なくなるとあちこち転居を繰り返してきた。

。

暗い部屋で留守電のボタンが赤く光っていた。何件か仕事の依頼が入っているのだろう。

電気を点け、上着をハンガーにかけた。

そのあいだにも、また電話が鳴ったが桧作は取らなかった。

「只今、調査のため外へ出ています。ご用の方は、お名前とご用件、連絡先をどうぞ。追って連絡差し上げます」

留守電メッセージが応答したあと、何も言わないで相手は電話を切った。事務員を雇うほどの余裕がないため、こういう対応をせざるをえないのだ。

お気に入りのロックバンドのCDをステレオコンポでかけた。テレビをつけると仕事ができないからだ。コンビニで買って来た弁当を食べながら、今日の仕事の報告書を書き終えた。

留守電を再生し、依頼内容を確認した。二件の依頼が入っていた。一つは行方不明の猫を捜索してほしいというもので、もう一つは自分に代わって、生まれ故郷の今は誰も住まない家の様子を、ビデオに撮ってきてほしいというものだった。猫を探すのは無理だが、故郷のビデオは交通費などの条件次第だ。明日、電話して詳しい内容を聞いてみなくてはならない。

そのあとで、テレビをつけた。ニュースをチェックしてから、バラエティー番組に変えてみたが、あまり見る気になれなかった。吹き込まれた誰かの笑い声が寒々しく部屋に鳴り響く。

キッチンのゴミ箱に弁当の殻を捨てようとする、一杯で入らなかったのも、ゴミ袋を箱から引き出し、ベランダのダストボックスに持っていった。弁当ばかり食べているので、プラスチックのゴミが溜まって困る。なんとか押し込んで蓋を閉めた。ベランダから外に目を移すと遠くの街の明かりが見えた。ふいにぶるっと身震いしそうになる。夜になって、大分、冷え込んできた。もう、秋も終わりに近づいている。こんな、^{わび}侘しい生活を好きこのんでしている訳ではなかった。やはり、自分ももっと人間らしい生活をすべきかもしれない。だが、この仕事をはじめてから、こんな綱渡りのような生活では、女性を幸せに出来ないかもしれないと思うようになった。

夕方、見かけた加凜の面影が脳裏をかすめる。

五年前のあの日、桧作はただの通りすがりのように、挨拶をして加凜と別れた。

あのときの彼女の少し寂しそうな笑顔を忘れられなかった。

それでも、秘密を知られたからには、彼女には二度と逢えない。

この五年間、その二つの気持ちの間で揺れ動いた。

桧作は五年前の早春のあの日、加凜とはじめて逢った。

過去へ飛んだとき、いつも、何故か出発の場所とは違うところにたどりついてしまう。それが悩みの種だったが、現実に戻ったとき、それまで一度も人に目撃されることはなかった。でも、あの日は違った。

あのとき、秘密の依頼を受けて、一週間前の、ある事件の現場に飛び、事件の起きる様子を目撃して戻ってきた。そのとき、桧作は遊歩道を歩いていた女性の目の前に、転がり出てしまった。そして、彼女を避けようとして、バランスを崩し、もんどりうって、意識を失った。気がつくと病室のベッドの上にあった。すぐ横に見知らぬ女性が座っていた。

「良かった。気がついたんですね。お医者様の話だと、手の骨が折れてるけど、脳には異常ないということでした」

「骨が折れてるんですか」

桧作は自分の右手を動かそうとして、痛みに顔をしかめた。

「こりゃ、ほんとに折れてるみたいだね」

自分のことを見つめる彼女の顔が、まるで如来像のように優しく輝いていた。彼女は黒田加凜と名のった。

桧作はここまで連れてきてくれたことに感謝して、礼を述べた。

彼女は気にしないようにと言った。そして、桧作のことを不思議な人だと思いつつも同情してくれているようだった。少し元気になってくると、病室から出て休憩室でお茶を飲みながら、話をしたりした。

「私にはあなたが上から降ってきたように見えたんです。でも、上に歩道橋があったわけでもないし、街路樹に登っていたとかかしら。でも、私、そんなこと他人に言ったりしませんから。安心して」

右手を怪我してしまったために、食事をするのも字を書くことも満足にできず、毎日、些細なことにいらいらしていた。でも、加凜の笑顔を見ると、ところが安らいだ。

それから、彼女とときどき逢うようになった。

彼女にも、自分の能力について語らなかった。信用できる人間なんて、世の中にはいないと思っていたのだ。

でも、彼女のことが気になって仕方なくなってきた。いつも、自分が元気付けてもらうばかりで、相手に何もしてあげられないのを心苦しく思ってもいた。

あんなことをしなければ、今は彼女と幸せに暮らしているかもしれなかった。

最近、加凜があの写真館で働き始めたということを知って驚いた。なんという偶然だろうか。

桧作は部屋に戻って、オカリナを吹きはじめた。

ときどき気持ちがざわめいて、どうしようもなくなったときに、ひとり吹いてみるのだ。

自分は過去を見られても、それをどうにも変えることはできない。そのジレンマにいつも苦しめられる。そんなときに無心で吹き続けると、少し気持ちが和らぐ気がした。

彼が自分で作って奏でるメロディーは、初夏の木々のざわめきや潮の香り、水の輝きなどを思いおこさせると言った人がいた。

そういえば、加凜もあのときこれを聞いて、とてもなぐさめられたと言ってくれた。

今更ながら、思いきって加凜にここの連絡先を伝えてみようかと考えた。

永遠に誰も信じないなんて、なんとも悲しいことだ。彼女のことは信じてみたいと思った。もし、それで裏切られたらそれまでだが。もう、どうとでもなれと思っていた。

休日に久しぶりの写真撮影に繰り出した。

雑多な街並みを歩きながら、シャッターチャンスを狙う。

コスプレの女子高生がみんなの好奇の目を集めながら通ったが、撮りたいとは思わなかった。曲がり角で、恐らく明治か大正時代から続くような米屋をみつけて、迷わずシャッターをきった。

写真コンテストを狙うなんて目標をたてたものの、一体、自分はどんな写真を撮ったらいいのか迷い続けていた。受賞するような作品はどれも、何か奇抜さがあったり、世相を反映したものばかりだ。お世辞にも綺麗とは言えないものも多い。そういった何かを入れなくては、賞は無理だろう。フリーカメラマンになるには、他に大御所カメラマンに弟子入りして修行する道もあったが、加凜は歳をとりすぎている。

このまま、あの写真館で働き続けるのもひとつの道だ。そのためには、どうしても栖栗茂に認めてもらう必要がある。

五年前に加凜が桧作と会ったあの日のことを、加凜は今でもときどき思い出す。

あの日、加凜がよい被写体をもとめて、朝早くから遊歩道を歩いていたとき、ふいに目の前に男が落ちてきた。加凜は驚いたが、男は打ちどころが悪かったのか、ひとこと呻いたあと、動かなくなった。しばらく何が起きたのかわからず、呆然としていたが、やっと思いついて加凜はその男に駆け寄った。

「大丈夫ですか」

揺すっても、男は目を覚まさない。気を失ってしまったらしい。

急いで一一九番通報し、救急車を呼んだ。

ためらいつつ男の胸に耳をあてると、規則正しく心臓の拍動が聞こえた。鼻の下に手をかざしてみると、ちゃんと呼吸もしているらしい。

救急車を待つあいだ、加凜は見ず知らずの男を膝にかかえこんでいた。無防備な様子にころを打たれたのかもしれない。男の顔は、眠っているようだった。朝日に照らされて、長い睫毛が輝き、端正な顔は、とても安らかだった。まるで、死に瀕した小鳥か、あるいは天使のような生き物に出会った気持ちになった。自分が助けてあげなくてはいけない。自分なら助けてあげられる。

医師の診断では、幸い、腕の骨折だけで、脳などに障害を起こしているわけではないということだった。病室で、男が目を覚ましたときに、加凜は思わず安堵の溜息をついた。自分でも、なぜ、ここまで男に同情しているのか、わからなかった。でも、放っておきたくなかったのだ。今から思うと、加凜はこのとき、すでに桧作にひとめ惚れしていたのかもしれない。男は、別に記憶を失っているわけではなく、桧作賢司と名のり、加凜に礼を言った。でも、家族に心配はかけたくないと行って、連絡を取ることを拒んだ。

それで、加凜は毎日のように桧作の病室を見舞った。腕の怪我だけだったので、彼はやがて退院した。退院するとき、彼は自分の名刺を加凜に差し出した。彼の仕事は私立探偵だった。

写真館のことは、休日でも頭から離れない。

楠山万由子が来てから、すべてが変わってしまったように加凜は感じていた。

彼女は、加凜が欲しいと思っていたものを、生まれながらに持っているような気がする。

その日、加凜がスタジオで七五三の三歳の女の子にぬいぐるみを見せ、ご機嫌をとりながら写真を撮っているところに、万由子が来た。

「見学していいですか。受付は、今、礼郎さんがやってくれてて、休憩時間なんです」

「いいけど。子供は敏感だから、恐い顔をしちゃだめよ。笑ってね」

「大丈夫。私、子供好きですから」

彼女は本当に子供の扱いに慣れているようだった。撮影途中で、子供が突然、万由子のところに駆け寄り、度肝をぬかれた。彼女が笑顔で抱き上げると、けらけら笑い出した。子供の行動というのは予測できないものだと思いためて思う。子供好きというのは子供に好かれる人種らしい。でも、そのおかげで仕事ははかどった。だが、順調に写真を撮り終えようとしているところで、ふと万由子の方をみると、また、あらぬ方を目で追いかけているのに気付いてしまった。きっと、そんな風に無意識に目を動かす癖があるのだと思ったが、子供の方に目を戻すと、その子も万由子の視線の先を見て笑っていた。万由子の方ではなく、別な何かを見て笑っているのだ。

これは一体どういうことなのだろう。頭がおかしくなりそうなので考えるのはやめた。全部、気のせいだと思うことに決めた。

その日、撮影が終わって片付けを始めたところで、栖栗に呼び止められた。

「この頃、なかなか腕を上げているようだね」

「本当に、そう思われますか」

「うん。陰翳礼賛、大いに結構だ。大分、良くなってきた。ところで、近頃、礼郎はどんな様子かね？」

「ええ、彼の写真は若い人に人気ですよ。宣材写真を撮ってほしいという依頼が多いみたいです」

「そうかね」

宣材写真を撮るというのは、オーディションなどに応募するときを使う、ポーズをつけて、多くのショットを撮影する写真のことだ。ポートレートと同じようなものだが、こちらは、その子の特徴を打ち出すような、生き生きとした表情やポーズが求められる。

ときどき、栖栗氏は加凜に、礼郎のことを尋ねた。加凜もそんなに礼郎と親しいわけではなかったもので、あまり詳しいことは答えられなかった。

礼郎は栖栗とほとんど話をしない。どんな写真を撮っているか、たまには見せなさいと栖栗が言うことがあったが、それを礼郎は無視していた。加凜は暗室に乾燥させている礼郎の写真を何度か見たことがあった。彼は筋がいいように思う。どこことなく昔の栖栗の写真と似たようなところがあるとも感じた。だが、礼郎に言ったら否定することだろう。

礼郎と加凜は最初の予約の段階で仕事を二つに分けていた。礼郎が受けた電話は彼の担当、加凜が受けた電話は彼女の担当だ。でも、万由子が来てからは、彼女に適当に振り分けてもらうことにした。受付のスケジュール帳に加凜と礼郎の欄を作り、それぞれの予約を記入していき、ダブル・ブッキングを防ぐ。それから、暗室の使用は、従来通り入り口の横に吊るしてある予約簿にそれぞれの名前を入れていた。

ある日、加凜が現像作業をしているとき、廊下から、子供の声が聞こえてきた。今日の予約には子供はいなかったはずだ。それに、こんなに沢山の声が聞こえてくるなんて。子供たちが廊下を走っていく振動が伝わってくる。キャーキャー叫びながら、走っていき、キー、ボタンと扉を閉める音が響いた。加凜は焼付けする手を休め廊下に出て、あちこちの扉をあけてみたが、子供などいなかった。その日は、それ以後、音は聞こえなくなった。考えてみるとあのドアは、廊下の突き当たりの横にある部屋からだったように思った。閉めるときにキーと妙な音がするのはあそこだけなのだ。

そこは栖栗のプライベートな部屋の一つで、彼以外の者は入らないはずだった。

加凜はふと思立って、休憩室で万由子に尋ねてみることにした。

「ねえ、あなたあれが見えるの？」

「あれって？」

「笑わないでね。私、実は栖栗さんにこの館には、座敷童子がいるって聞いたのよ。それに私も声や足音を聞いたわ。あなたには姿も見えるの？」

「黒田さん、つかれているんじゃないですか。そんなこと考えない方がいいですよ。私、実は靈感がある方なんですけど、ここに悪いものはいない感じです」

「じゃあ、いいものはいるの？」

「だから、慣れてない人は、あんまり気にしない方がいいんですって」

彼女は意味深な言葉を残し、部屋を出て行った。

加凜の予約していた時間になったので、暗室を使おうとして行ってみると、まだ前の礼郎が中で作業をしているようだった。暗室は誰かが開けてフィルムが感光してしまわないように、鍵をかけて作業することになっていた。加凜は試しにノックしてみた。

中から返事があってしばらくしてから、礼郎がドアを開けた。

「気付かないうちに時間が過ぎてて... 申し訳ない。もう今は片すところなんで、中に入っていますよ」

加凜は言われるままに中に入った。まだ、フィルム洗浄のために水道水が出しっぱなしになっていた。礼郎は、台の上に出してあった彼用の現像液などのタンクを片付けていた。その間、加凜は乾燥させるために吊るされた礼郎のプリント写真を眺めていたが、ふいに後ろから礼郎が話しかけてきた。

「それは、宣材写真だ。今日はタレント志望の子が撮られに来たんだ」

「この子、可愛いですね。もしもデビューしたら、凄いな」

「うーん。もとより良く撮れてると思うから、実物みたらどうだろうな」

加凜は礼郎のこういうところが好きでなかった。きっと、ひどい顔になっているだろうが、後ろ向きなので見られる事もない。実際よりよく撮れているなんて、すごいですね。賞賛の言葉を投げながら、うなずいた。

「ところで、黒田さんは、茂じいさんの跡を継ぐつもりなの？」

「そんなつもりはないです。跡継ぎは礼郎さんですよ」

「誤魔化さなくていいよ。はっきり言って、茂じいさんは俺なんかより、黒田さんの方を重要視しているんじゃないかな」

「そんなことないです。それに、そんな風に思うなら、もっと、栖栗さんに写真を見せに行ったりしたらいいのに。礼郎さんの写真、素敵じゃないですか」

「お世辞はやめてよ」

相変わらず可愛げがないと思う。どう接していいのか、加凜にはわからない。

加凜は振り返って礼郎の顔をうかがおうとしたが、そのとき急に後ろから手でがっしり抱え込まれた。

「何するんですか！」

「何もしないから、静かにしてよ。今更こんなこと言っても、信じてもらえないかもしれないけど、俺は黒田さんのことが好きだ。黒田さんはみんなを公平にみる人だね。それにじいさんに何を言われても我慢している。忍耐強さには脱帽するよ。ねえ、俺とつきあってくれないかな」

加凜は驚いて何も言えなかった。抵抗したら、何をされるだろうか。

「はっきり言っておくけど、茂じいさんが死んだら、この写真館はうちの親父のものになる。黒田さんがここで働き続けられるかは、俺の意見にかかっているって、わかってんの？」

何も答えない加凜に業を煮やしたのか、礼郎はいらついた口調で言った。礼郎の手は加凜のお尻にも遠慮なく触れた。

吐き気をもよおした。

「もう、やめて下さい！」

懸命にもがいて、そこからなんとか逃げようとしたが、びくともしなかった。

「君の答えを聞くまで、離せない」

気持ちを逆なでするような言葉は逆効果だと思った。とっさに加凜は礼郎の手に噛み付いた。礼郎は悲鳴を上げて、手を離した。

「これでおあいこね。今日のことはなかったことにしましょう！ あなたがしたこと誰にも言わないわ。私はそんなみみっちい女じゃないから。でも、こんなことが二度とあったら許さない。気をつけて！」

せいっぱい^{きよせい}虚勢をはった言葉を投げつけると、加凜は急いで暗室を出た。

その日は、気分が悪いからと栖栗茂に伝えて、いつもより二時間ほど早く帰った。

帰り道、後ろを何度も気にしながら、夜道を歩いた。

さっきの礼郎に触られた嫌な感触が何度もよみがえってきて、気持ち悪さと、悔しさが込み上げた。いい年して、そんなにショックを受けるなんてと、笑われるかもしれない。でも、こんなことに年齢は関係ないと思った、

虫の音が^{くさむら} 叢 から聞こえてくる。

車のヘッドライトが眩しく照らしながら、定期的に通り返っていく。

家に帰ってすぐに布団をかぶって泣きたかった。

礼郎の気持ちは迷惑だったが、彼に悪気があったわけでもなく、本当に加凜を好きなのかもしれない。でも、まったく予期していなかったことだ。こんな小さな写真館で、人間関係のトラブルをかかえては、そのまま働き続けるのは難しいかもしれない。礼郎と顔をあわせるのは、はっきり言って気まずい。写真館をやめるべきなのだろうか。

平日の夕食は弁当の宅配を利用していた。母親は食べ終わって、居間に座っていた。

「お帰りなさい。今日は早いね。ご飯は？」

「今日は午後から休暇をとって、人に会って早めに食べてきたから」

「そうなの」

嘘をついた。

風呂を掃除して、湯をはり、湯船につかった。

思わず涙があふれたので、顔までつかった。

風呂からあがって、すぐに布団に入ったが、手足が締め付けられるような不快感のために、なかなか寝付かれなかった。

変な夢をみて、何度も目を覚ました。その度に、暑くもないのに、じっとりとした汗が、手の平や首筋に出ているのを感じた。

何回目かに、もう寝るのをあきらめた。冷静に考えると、こんなことで仕事を辞めてしまうなんて、悔しいことだところの底から思った。

一体、自分はどうしたらいいのだろうか。

誰か助けてほしい。子供みたいに不安に思った。

「キャーッ！」

ある晩、悲鳴を聞いて加凜が駆けつけると、万由子が窓の前でしゃがみこんでいた。

「どうしたの？」

「あそこっ！」

彼女の指さす方を見ると、五本指をぴたぴたと吸盤のように貼り付けて、ヤモリが窓ガラスの上を歩いていた。

「なんだ、ヤモリね。平気よ。あれは害虫なんかを食べてくれるし、歩く姿はユーモラスで愛嬌があるじゃない」

「嫌です。絶対！ 虫を食べるなんて、許せない！」

まわりに木々も沢山あるこの写真館の門灯のまわりには、夜になると羽虫などが集まる。そのあたりをヤモリが、のろのろと歩き回っているのはよく見かける。

「俺も、あれは嫌いなんだ」

いつのまにか、礼郎がやってきてそう言った。加凜はあれ以来、彼と言葉を交わしていなかったもので、気まずかった。

「そうですねー!？」

万由子は礼郎の方を向いて、嬉しそうにおおげさな相槌をうった。

「ヤモリっていうのは、家を守ってくれるからヤモリっていうって聞いたわ。家に来る虫を食べてくれたり、別に悪いものじゃないのよ」

「でも、嫌なものは嫌なんだよ」

礼郎と万由子に非難されているような気がして、加凜はまいった。

「嫌なら、仕方ないですね。でも、退治する方法なんてなさですけど」

「虫がいるから集まってくるんだ。殺虫剤で駆除すればいい」

「止めてください！」

今度、こう言ったのは万由子だった。

「なんだよ、虫は嫌じゃないのかよ。アルバイトなのに、よく言うよな」

「アルバイト、アルバイトって、差別はやめて下さい！ 大体、虫を殺すために殺虫剤をまくなんて、環境破壊ですよ。その殺虫剤が地面に流れたりして。殺虫剤だって人体にも有害なんですから」

そう言うと、万由子は行ってしまった。

「ったく、訳わかんねー奴だな。急に怒り出して」

万由子は、こんな風に環境のことを考えるようなまじめな面もあるのかと加凜は少し見直した。

だが、礼郎とふたりで取り残されたことに気づいて、加凜も逃げるようにそこを立ち去ろうとしたとき、呼びとめられた。

「待ってよ、黒田さん。その一、この前は急にあんな事して、悪かった。ごめんよ。女性にあんまり慣れてなかったんで、どうしていいか分からなかったんだ」

あれだけ言ったのに、懲りていないことに驚いた。だが、謝ってくるなんて、根は悪い人でないのかもしれない。でも、この際、きっぱり言ってしまふべきだと考えた。

「他に好きな人がいるんです。だから、申し訳ありませんが、私は礼郎さんとはお付き合いできません。するつもりはありません」

「そうか。黒田さんはもっと利口だと思ったんだけど。俺の誘いを断るなんてな。じゃあ、じいさんが死んだら、どうするわけ？」

「栖霞さんにもしものことがあったら、私は辞めますから、ご心配なく」

「気にいらねえな。あんたは人に媚びるってことがないのか」

礼郎は加凜のことをヤモリでも、見るような目で眺めた。

その日、加凜は現像作業中に、またあの声と足音を聞きつけ、ふらふらと暗室から出ると、今さっき、音をたてて閉まった突きあたりの扉の前に来ていた。

勝手にあけてはいけないと理性は警告していた。

でも、どうしても、この部屋に何かがあるような気がして、開けずにはいられなかった。

それに多分、鍵が掛かっているかもしれない。

だが、ハンドルに手を掛けると簡単に回り、扉はあのキーという音とともに開いた。

その部屋には窓がなく、壁全面と部屋の中にも何列か、まるで図書館のようにに天上まで届く本棚が並んでいた。

中を見回しても誰もいなかった。

本棚の中に並んでいるのは、ほとんど全部、フィルムのファイルだった。背に撮影年月日と場所などがメモされていた。プリントした写真も一部、その横に並んでいる。一冊、手にとってみると、昔のアメリカ南部、スラムと思しき路上に群がる黒人達や、日本のどこか貧しい町の労働者達の容赦ない眼差しが、そこにあった。彼らは、あわれな姿を写真に撮られることを怒っていたのだろうか。あるいは、写真というメディアを通して、自分たちの怒りを伝えようとしていたのだろうか。

それを元に戻して、棚の隅の方に目を移すと、ひときわ大きくて古そうなアルバムがあった。

開いた途端、どこかヨーロッパの裕福な家の子供たちのセピア写真が目飛び込んできた。

偶然開いたページの写真には、四人の女の子達がおそろいのニット編みのワンピースを着て、左から背の高い順に、階段状に並んで写っていた。

一番小さな子は三歳くらい、一番大きな子は十五、六だろうか。

あどけない表情に思わず顔がほころんだ。

加凜はさっきまでの怖さも忘れて、写真を次々めくっていった。

立派な身なりの夫婦が写っていた。

それぞれの人物の下に、Louis, Annastasiaと書いてあった。

祖父母らしき人達や親戚も入った集合写真もいくつもあった。

同じ家族の移り変わりを眺めるのは楽しかった。

子供達が次第に成長し、年長の兄弟は大人びていく。そして、あたらしい兄弟姉妹が増えてもいた。

加凜はふと、今の時代にもこんな写真があったらいいのにと考えた。みんな、そのときそのときの出来る限りのおしゃれをして、晴れがましい顔で写真に写っている。老いも若きも、一つの家族として結びついている。もしかしたら、今では希薄になってしまった家族の絆を実感できるかもしれないと思った。

だが、次にめくったページを見て、加凜は凍りついた。それは、あの少女達の家族を写したものだ。だが、端の方に松作賢司にそっくりの人物が写りこんでいたのだ。これは一体どういうことだろう。

“Remember me! (私を思い出して!) ”

ふいに少女の甲高い声が響いた。

驚いてそっちの方を見ると、はじめの写真に写っていた一番年下の子にそっくりの子が本棚の影からこちらを見つめていた。

ブルネットのカールした髪、大きなブルーの瞳、ほっぺたはリンゴのようだ。

くすんだカーキ色のワンピースの上に赤い長いニットを重ね着して、えんじ色の靴を履いている

。

まるで仏蘭西人形のような。

これはさっきの写真と同じ格好だった。

写真には色がなかったが、こんな色だったのかと思った。

だが、目を離れたすきに消えて、あちこち探してももういなかった。

もう一度、さっきの写真を見てみるとその写真の下には左から順に、Mary, Glace, Anna, Sophieと書いてあった。

加凜はその部屋の中を元通りにして、栖栗に気付かれないことを祈り、こっそり外に出た。それにしても、あれが座敷童子なのだろうか。座敷童子と言えば、おかつぱ頭の女の子か、あるいは男の子でもいいが、和服を着ているイメージだった。あれは、むしろ子供の幽霊ではないだろうか。それから、Sophieという栖栗夫人と同じ名前がひっかかった。